



発行所
日本工業大学
広報課
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号 345
電話 0480(34)4111

産学交流スタート

埼玉工業人クラブと懇談会

本学は、四月二十三日、埼玉工業人クラブ（会長長谷川秀夫氏）と懇談会を開き、席上、同工業人クラブから提案された「日本工業大学・埼玉工業人クラブ産学交流会」（仮称）設置について、今後、大川陽康教務部長、廣瀬治男教務部長補佐が設立準備委員会として参加、同交流会の早期実現を図っていくことが決まった。

懇談会には本学から三浦朝郎学長をはじめ大川部長、仲嶋正之総務部長、竹内淳彦学生部長、渡辺寛機械工学科主任教授、岩瀬勝電機工学科主任教授、木村蔵司建築工学科主任教授、青田昇システム工学科主任教授、廣瀬部長補佐、市川益徳教務部長の十名、埼玉工業人クラブから長谷川会長、清水啓三郎副会長（同精工所社長）ら七名、同クラブの事務局となっている日刊工業新聞北関東支社の野々垣柳治支社長ら五名の合計二十二名が出席して開かれた。席上、三浦学長は大学として地域の文化、産業に貢献していくことは重要な使命であり、そのため、常に開かれた大学を目指していることを強調、その意味からも今回



学内施設を見学する工業人クラブの人たち

人事異動①

四月一日付

任用

▽機械工学科客員教授
吉田清太（よだ・きよた）



大正十四年一月九日生。昭和二十二年三月、東京高等工業学校（現千葉大学工学部）卒業。二十六年三月、東京大学工学部機械工学科修了（文部省派遣内地留学生）。工学博士（東京大学）。現在、理化学研究所主任研究員、国際深堀り研究会（IDDRG）副会長、薄鋼板成形技術研究会会長。

▽教養科講師（英語）
森山幹郎（もりやま・みさお）



昭和二十年八月九日生。四十七年六月、国際基督教大学大学院修了。五十二年度から本学の非常勤講師として、英語を担当。工業技術英語と産業・工業国際関係論の研究をしている。▽教養科講師（英語科）
T・J・マックグラス



一九三三年、カナダ・モントリオール州のフォート・ウィリアム生まれ。ヨーク大学など三

つの大学で、人類学、英文学などを学ぶ。五十九年度から本学の非常勤講師。

▽学生課職員
高橋京子（たかはし・きょうこ）



昇任

▽電気工学科教授
高橋篤夫（たかはし・あつお）



昭和十六年三月十七日生。四十二年三月、慶応義塾大学大学院工学研究科電気工学専攻修士課程修了。同年四月、本学電気

工学科講師となる。五十年四月同学科助教授。工学博士（慶応義塾大学）。五十八年十一月から一年間、西ドイツのブラウンシュバイク工業総合大学に留学し、「大電流アーク放電現象」の研究に従事。

▽電気工学科助教授
広瀬洋一（ひろせ・よういち）



昭和二十二年九月二十九日生。四十七年三月、青山学院大学大学院理工学研究科電気電子工学専攻修士課程修了。同大学院理工学部助手を経て、四十八年四月本学電気工学科助手となる。五十六年四月、講師。工学博士（青山学院大学）。学位論文は「カルコゲナイドアモルファス半導体における光拡散現象と不揮発性メモリ素子の研究」

▽システム工学科助教授
鈴木敏正（すずき・としまさ）



昭和二十三年五月十日生。五十四年三月、東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了。「誘電体ゲルマニウム酸鉛単結晶の育成と光メモリ特性」で工学博士の学位を授与。同年四月、本学システム工学科助手となり、五十七年十一月同学科講師。

▽機械工学科講師
伏見恒夫（ふしみ・つねお）



人事異動②

▽配置換え（四月一日付）

片山滋友講師 電気実験センターから情報技術センターへ、電気工学科兼任。
丹羽次郎講師 電気実験センターから情報技術センターへ、電気工学科兼任。

城山正則教育技術員 システム工学科から建築技術センターへ
▽異動（四月一日付）

森正美・電気実験センター講師（前同センター教育技術員）岡野修一・日本工業大学工業教育研究所員
菅沢一之・日本工業大学工業教育研究所員
▽退職（三月三十一日付）
三上繁太郎教授
大賀賀弘教授
樋川和子・学生課職員

れた設立準備委員会によって具体化を急ぐ方針である。

60年度出身高校別入学者数

- | | |
|--|---|
| 北海道 札幌工（1）函館工（1）旭川工（1）室蘭工（1）釧路工（1）苫小牧工（2）名寄工（1）青森県 青森工（1）弘前工（4）八戸工（1）五所川原工（2）むつ工（1）【岩手県】盛岡工（2）大船渡工（2）福岡工（1）宮古工（1）一関工（1）宮古（1）【宮城県】県立工（1）白石工（1）米谷工（1）仙台工（1）【秋田県】男鹿工（1）大館工（1）能代工（3）由利工（3）大曲工（1）横手工（1）【山形県】新庄工（1）米沢工（4）長井工（2）鶴岡工（3）酒田工（1）蔵王工（2）山形電波工（1）【福島県】二本松工（1）【埼玉県】久喜工（7）春日部工（29）熊谷工（17）玉川工（6）秩父農工（4）私・越生（2）獨協埼玉（1）岩槻（1）上尾東（1）【千葉県】京葉工（2）千葉工（7）市川工（12）清水（6）東総工（5）茂原工（4）千葉工商（4）千葉経済（4）勝田工（5）大宮工（3） | 【北海道】札幌工（1）函館工（1）旭川工（1）室蘭工（1）釧路工（1）苫小牧工（2）名寄工（1）青森県 青森工（1）弘前工（4）八戸工（1）五所川原工（2）むつ工（1）【岩手県】盛岡工（2）大船渡工（2）福岡工（1）宮古工（1）一関工（1）宮古（1）【宮城県】県立工（1）白石工（1）米谷工（1）仙台工（1）【秋田県】男鹿工（1）大館工（1）能代工（3）由利工（3）大曲工（1）横手工（1）【山形県】新庄工（1）米沢工（4）長井工（2）鶴岡工（3）酒田工（1）蔵王工（2）山形電波工（1）【福島県】二本松工（1）【埼玉県】久喜工（7）春日部工（29）熊谷工（17）玉川工（6）秩父農工（4）私・越生（2）獨協埼玉（1）岩槻（1）上尾東（1）【千葉県】京葉工（2）千葉工（7）市川工（12）清水（6）東総工（5）茂原工（4）千葉工商（4）千葉経済（4）勝田工（5）大宮工（3） |
|--|---|

60年度

特別奨学生

機械工学科

及川昭男（筑波大学付属坂戸）



電気工学科

金澤勝彦（埼玉県立狭山工）



末武稔也（新潟県立新潟工）



建築学科

池田憲史（埼玉県立大宮工）



金井敏光（新潟県立高田工）



小林隆之（新潟県立新潟工）



権藤繁雄（東京工）



- | | |
|--|--|
| （2）甲府工（6）機山工（3）北富士工（1）長野県 長野工（6）松本工（4）上田千曲（12）岡谷工（2）飯田長姫（2）飯田工（7）駒ヶ根工（2）中野実業（1）岩村田（9）箕輪工（3）池田工（5）【新潟県】新潟工（3）新潟東工（2）長岡工（1）高田工（5）柏崎工（3）新発田南（2）新津工（3）燕工（1）直江津工（3）巻工（1）高志（2）塩沢商工（1）中条工（1）新井（1）富山県 富山工（1）大沢野工（2）不二越工（1）福野（1）石川県 七尾工（2）【福井県】春江工（1）【静岡県】修善寺工（9）吉原工（1）清水工（5）静岡工（2）掛川工（4）浜松工（3）浜松城北工（4）静岡清工（6）【愛知県】刈谷工（1）豊橋工（8）東海工（1）三河重県 尾鷲工（1）【京都府】石原（1）宮津（1）大府工（1）茨木西（1）兵庫県 兵庫工（1）尼崎工（2）豊岡実業（2）東播工（1）西脇工（1）龍野実業（1）篠山産業（1）御影工（1）奈良県 奈良工（1）【和歌山県】箕島（1）新宮（3）鳥取県 鳥取工（1）鳥取西工（3）倉吉工（1）米子工（1）境港工（2）【岡山県】岡山工（2）津山工（4）【広島県】三次工（1）宮島工（2）本江工（1）市立広島工（4）三原工（1）広島商船高専（1）山口県 岩国工（3）南陽工（1）下関中央工（1）【徳島県】徳島工（1）香川県 高松工芸（3）多度津工（2）【愛媛県】新居浜工（1）松山工（1）吉田（1）新田（2）高知県 高知東工（2）須崎工（1）福岡県 小倉工（1）福岡工（1）嘉穂工（1）【長崎県】上五島（1）佐世保工（1）熊本県 熊本工（2）球磨工（1）八代第一（1）【宮崎県】日向工（1）【鹿児島県】鹿児島工（2）加治木工（1）岩川（1）大島工（1）大島（1）【沖縄県】沖縄工（3）美里工（2）北部工（2）宮古工（1） | （2）甲府工（6）機山工（3）北富士工（1）長野県 長野工（6）松本工（4）上田千曲（12）岡谷工（2）飯田長姫（2）飯田工（7）駒ヶ根工（2）中野実業（1）岩村田（9）箕輪工（3）池田工（5）【新潟県】新潟工（3）新潟東工（2）長岡工（1）高田工（5）柏崎工（3）新発田南（2）新津工（3）燕工（1）直江津工（3）巻工（1）高志（2）塩沢商工（1）中条工（1）新井（1）富山県 富山工（1）大沢野工（2）不二越工（1）福野（1）石川県 七尾工（2）【福井県】春江工（1）【静岡県】修善寺工（9）吉原工（1）清水工（5）静岡工（2）掛川工（4）浜松工（3）浜松城北工（4）静岡清工（6）【愛知県】刈谷工（1）豊橋工（8）東海工（1）三河重県 尾鷲工（1）【京都府】石原（1）宮津（1）大府工（1）茨木西（1）兵庫県 兵庫工（1）尼崎工（2）豊岡実業（2）東播工（1）西脇工（1）龍野実業（1）篠山産業（1）御影工（1）奈良県 奈良工（1）【和歌山県】箕島（1）新宮（3）鳥取県 鳥取工（1）鳥取西工（3）倉吉工（1）米子工（1）境港工（2）【岡山県】岡山工（2）津山工（4）【広島県】三次工（1）宮島工（2）本江工（1）市立広島工（4）三原工（1）広島商船高専（1）山口県 岩国工（3）南陽工（1）下関中央工（1）【徳島県】徳島工（1）香川県 高松工芸（3）多度津工（2）【愛媛県】新居浜工（1）松山工（1）吉田（1）新田（2）高知県 高知東工（2）須崎工（1）福岡県 小倉工（1）福岡工（1）嘉穂工（1）【長崎県】上五島（1）佐世保工（1）熊本県 熊本工（2）球磨工（1）八代第一（1）【宮崎県】日向工（1）【鹿児島県】鹿児島工（2）加治木工（1）岩川（1）大島工（1）大島（1）【沖縄県】沖縄工（3）美里工（2）北部工（2）宮古工（1） |
|--|--|

日本の大学では最大の規模 超高压放電研究設備を新設

五十九年度学内特別研究設備のうちで、最大規模の研究設備である超高压放電研究設備が導入される。この研究設備を収納する建物がすでに年度内に完成しており、設備の組み立て工事を待たずに稼働している。

本設備は、大学レベルでは最大級の超高压放電設備である。このIGは、パルス的に高电压を発生する、いわば「かみなり」発生装置であり、その公称電圧は「三百万ボルト」と著しく大きい。我が国の大学の中で、これまで最大とされた東京大学や東北大学の二百五十万ボルトをはるかにしのいでいる。

したがって本学のIGの発生電圧値は、大学関係では日本一であるばかりでなく、おそらく世界的に見ても最大級のものである。このIGの高さは約十メートルで、収容建屋（超高压ホール）は絶縁空間を確保するため、高さが床から天井まで約二十メートルあり、これは、六階建てのビルの高さに相当する。床面の広さは、二十六メートル×三十二メートルありで、建坪二十五坪程度のマイホームならば、十棟がそっくり納まる規模である。しかも、放電による外部への各種障害を避けるため、防音や雑音防止のための金網によるシールド等について十分に配慮した。またこのホール内において、交流三十万ボルト（実効値）、直流四十万ボルトまでの試験が可能である。さらにホールに接して、二階建ての付属室が設けられている。一階部分には、各種装置の操作・観測の部屋と、教室を兼ねた一般用の観測室があり、これらの部屋からホール内を一望できる。二階部分には、関連研究用実験室と、ゼミナールや研究会等にも使える部屋が用意されている。

さて、このような大規模な施設を設置した経緯について、簡単に触れる。近年、電力使用量は確実に増加の一途をたどり、電力を大量かつ効率よく送ることが、強く要求されている。その一方として、送電電圧の格上げ、すなわち百五十万ボルト（超高压またはUHV）送電が、我が国はもとろん世界の先進諸国で検討されている。これを受けて電力関連の各社では各種の超高压試験機器の新設・充実を進めている。しかし各大学においては、これらの装置自体が高価である上に、それを置く建屋も大型のため、総費用は莫大となり、装置の新設等は容易でない。したがって、各大学の超高压試験装置の設置状況は極めて不十分な現状にある。

このため、この分野の大学の研究者は、設備を有する会社等に出向いて装置を借用せざるを得ず、十分な研究を進めにくい環境にある。こうした現状を改善するために、本学は、

設備の解説

このたび本学に、超高压放電研究のための設備が新設された。本設備には、文部省の昭和五十九年度私立学校施設整備補助金が、設置費用の一部として充てられた。主要機器は、三百万ボルトのインパルス電圧発生装置（IG）と、交流および直流の超高压発生装置（いずれも日

研究室では 25

プラズマ物理研究室

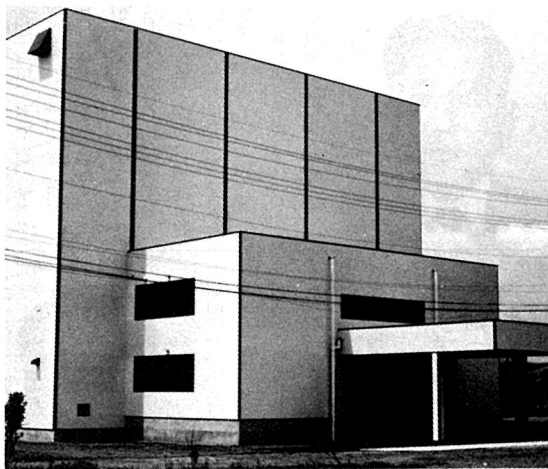
我々の研究室では、現在プラズマ中に励起されるソリトンと呼ばれる奇妙な波について研究しています。このプラズマ及びソリトンの名称は、最近一般的に用いられ始めた用語で、残念ながら大学の物理学の教科書にも、あまり見かけられません。もちろん古い教科書に載るようになっては、それほど研究する価値はないでしょう。

我々の住んでいる地球や月、その他の惑星を除いて、宇宙のほとんど、九十九パーセントは、プラズマと呼ばれる物質から構成されていると言われています。しかしこのプラズマ自体を研究したり、夢の

エネルギー源といわれる、人工の太陽、つまりプラズマによる制御核融合炉を地上に建設したりするには、あえてその一パーセントの地上で、その目的に合ったプラズマを生成しなければなりません。地上の実験室で、このプラズマを生成するには、我々の身の回りにある物質を高温度に熱しなければなりません。固体を熱すると、液体・気体へと変化し、さらに気体を高温に熱すると、分子・原子の電子が分離した状態、つまり負の電荷を持った電子と正の電荷を持った原子イオンに分離した状態になります。しかしこの状態では、まだ必ずしもプラズマ状態とは呼べません。

これらの電離した荷電粒子に、外から電磁気力を加えると、おなじみのフレミングの右手・左手の法則、大学ではローレンツ力と呼んでいる電磁気学の法則に従って運動し始めます。ところが、この荷電粒子が無限に集合すると、もはやこの電磁気力の支配をあまり受けずに、自分達自身の力に従って運動し始めます。この荷電粒子の集合状態をプラズマ状態と呼びます。

それではどうして、荷電粒子が集団を形成すると、外からの電磁気力の影響を受けなくなってしまうのか、実は荷電粒子自身が、電磁気力のみならず、そのもので、集団自体が十分外からの電磁気力に対抗できる、逆の電磁気力を生み出せるからです。このことが今日までも、制御核融合反応をは



完成した超高压ホール

陸上競技場の芝張り終わる

改修された陸上競技場の芝張りがこのほど完了した。芝生部分には、四百五十トラックの第一コーナーから第四コーナーまでの外周（築堤部分）とフィールド内の数カ所。芝はフィールド競技をする場所やトラックの外周の地表面をおおひ、競技者や観覧者にとって安全性や美観の面でよいばかりでなく、防じん効果も促すなどの利点をもっている。これで、ますます快適なスポーツが楽しめる。

八月完成をめざし 合宿所の建設進む

学生のクラブ活動などに利用される合宿所の建設が、いよいよ着工の運びとなった。建設場所は、改装したばかりの陸上競技場とクラブハウスの中間である。鉄筋コンクリート造二階建てで、学生八十人が宿泊できるほか、浴室や炊事場などが完備されている。完成予定は八月末で、現在、工事が急ピッチで進められている。

工業教育研究所 本学へ移設

工業教育に関する各種の調査研究などを行っている日本工業大学工業教育研究所が、四月一日に、東京工業高校旧目黒区駒場から本学の工業教育記念館内へ移設した。この移設にともない、岡野修一・菅沢一之両研究所員も本学へ異動した。

60年6月

行事予定

- 【6月】 学園創立記念日（休校）
- 【7月】 10日 休講
- 11日 22日 前期期末試験
- 23日 9月19日 夏期休業
- 23日 24日 補講
- 25日 29日 教職科目集中講義
- 【8月】 11日 17日 事務局一斉休暇
- 【9月】 17日 19日 教職科目集中講義
- 18日 前期期末試験成績発表
- 20日 後期授業開始
- 【10月】 1日 体育祭
- 4日 8日 後期履修申告
- 【11月】 1日 休講
- 2日 4日 大学祭
- 5日 休講
- 【12月】 21日 1月9日 冬期休暇
- 21日 22日 補講
- 23日 25日 教職科目集中講義
- 【1月】 10日 授業開始
- 22日 休講
- 23日 2月4日 後期末試験
- 【3月】 8日 学年末成績発表
- 20日 卒業証書・学位記授与式
- 【4月】 4日 入学式
- 4日 7日 オリエンテーション
- 8日 授業開始

韓国訪問

学長 三浦 靉 郎

四月二十八日から五月五日まで、はじめて韓国を訪れた。おもな目的は、金鳥（くも）工科大学を訪問することであった。

金鳥工大は、全国の工業高校の出身者だけを入れている、本学と全く同型の大学である。規模は、学生数も教員数も、本学の半分くらい。隣接して付属高等学校があり、六十名が選ばれて入ってくる。大学の設立にあたっては、多数の先生が先輩にあたる東工学園に来て、見学、研究をしたし、その後も毎年のように、何人かの先生が、あるいはマイコン設備、あるいは図書館のコンピュータ化などの研究に訪れている。李東湖学長も、最近三回本学に見え、そのたびに私も親しくお話をした。昨年ははじめての卒業生を出したので、その卒業式にぜひ出席するようにとの案内を受けたが、残念ながら行くことはできなかった。今回の訪問は、そのすべてに対する答礼という意味であった。

成田を立ったのは夕方六時、二時間あまりでソウルに着いた。空港には金鳥工大の金先生が迎えに来ていた。金先生は、われわれが五日にソウル空港を立つまで、終始案内役を勤めてくれた。外に出ると、遠く離れた大学から車が差し回されていた。ソウル大学工科大学などを訪れたソウルでの二日間、その車はいつもわれわれのお供をしてくれた。

ソウルから列車で亀尾（くみ）に向かった。ディーゼルの特急である。駅頭には、李学長みずから出てきた。そして学長みずから運転する車で大学に向かった。大学に着くと、まず正式の挨拶、学校の紹介、学内の見学、それから先生たちとの懇談があった。同行した長田教授は機械科の先生たちと、岩瀬教授は電子科の先生たちと専門の学科について懇談した。その中には、早く博士課程を作ってもらいたい、できたら研究をまともにに行きたいから、という若い先生たちの強い要望があったという。このあたりが、われわれの研究協力のこれからの焦点になるのかもしれない。

その日の夕方、大邸で正式の歓迎会があり、翌日は同じく大邸のホテルに泊まった李学長らに厚くお礼を述べて、学長は大学へ、われわれは慶州へ向かった。慶州から特急セマール号でまたソウルに戻った。

列車の旅は行きも帰りも、大変楽しかった。私は飽かずに外の景色を眺めていた。韓国といえば、木はみなオンドルに焚いてしまいい、山はみな禿山だというのが、小さい時から聞いていた話であった。しかし実際はまったく違っていた。見渡すかぎり青葉葉々なのである。数年前から国をあげての緑化運動がはじまっていて、みごとな成果をあげたのであった。道という道の両側は並木が延々とつづいている。木はプラタナスとポプラと柳である。プラタナスの天辺にはほうぼうにカササギの葉がある。朝起きてカササギの葉を聞くと、その日はいい事があるという、この国の諺がある。岩だらけの山にも植林が進んでいる。まだ直径十センチから二十センチの若木であるが、山という山がうっそうたる森に覆われる日も、そう遠くないことであろう。

山の岩の間にわずかな土を見つけて植林している姿を見て、涙がこぼれた。と、言ったのは、ソウルで泊まったロッテ・ホテルの専務であった。彼は日本人で、旧制第五高等学校の出身である。彼はまた、東京から電話をかけたとき、オリンピックを三年後に控えて、意気あがる韓国の姿を見てください、とも言った。

韓国には、熊本の五高の出身者がたくさんいる。私はかつて五高で教えたことがあるので、その専務、秋山さんが連絡をとってくれて、あと二人が訪ねてきた。ソウル大学の梁教授と国民大学校大学院の李教授である。我々四人は戦時中の辛くて楽しかった五高の生活を大声で語り合った。はては「あなたはいかにも美しい」というファウストの科白をドイツ語で言う者もいた。

私の韓国最後の晩であった。

フレッシュマンへのメッセージ

時間の流れに句読点をうて



和田敏一

文章には句読点がある。これをつけることによって、文章が明確になり、読みやすくなる。時間の流れも、同じようなものがある。したがって、時間の流れの折り返し、節目に句読点をつけないで、ただなんとなくダラダラと過ぎていけば、いったい何をしたのか、はつきりしない。ところで、諸君は、いままで（小・中・高）学校側から与えられた句読点のとおりに学校生活を送って来れば、問題はなかった。しかし、大学というところは、そうはいかない。与えられた句読点が極めて少ないところ、これが大学である。せいぜい、入学式、試験期間、夏・冬の休み、卒業式といった程度である。いや、試験や休暇は期間も大学でその期日を定めてはいるものの、あらゆる学生が、同一の日時に始めて同一の日時に終わるわけでもない。学生たちによって、その取り方は多様である。こうみてくると、あらゆる学生に共通の句読点、大学では入学式と卒業式ぐらいになつてしまふ。

あと、まったくの余白である。句読点をつけられていない。いままでのように、生徒全員が従わなければならない登校時間も下校時間も、大学にはない。自由である。だいいち、学校側から提供されるはずの時間割がない。自分自身で作成するしかない。多くの科目のなかから学びたいものを選択して、自分でカリキュラムを作る、つまり、自分自身で時間の流れに句読点をつけていくのである。といつても、何でも好きな科目を選ぶというわけにはいかない。いづれにしても、いままでの小・中・高の学校生活とは違って、大幅な自由が諸君に与えられている。句読点をどこにつけよう、と、諸君の考え次第だ。ところ

が、一部の学生は句読点をうて忘れたり、いや最も多いのは、自分自身で句読点をうておきながら、それを守らず、最後になつて周りの者に助けを求めて右往左往する。このような学生を少なからず見つけるのである。ここで、はつきりと申し上げておきたい。大学では、いかに助けを求めようと、教師は助かない。自分の行為には大人としての責任をもってもらいたいと考えているからだ。諸君は、教育と

いうものは暖かく、そして親切なものであるというイメージを抱いているにちがいない。正にその通りである。だが他面、冷たく、つきはなす教育も大きな意義をもつ。ことわざにも、獅子の子落とし、という。百獣の王の獅子は生んだ子の強さをためすために、子を深い谷に投げこみ、岩かどに取りついてあがつて来たものばかりをとりあげて育てるといふ。大学教育の特質は、どちらかといえば後者に属する。

さて、諸君は、大学生活という時間の流れに、だれにも干渉されずに自由に句読点をうてつことが出来る。だが同時に、自分自身で決めたことについては自分で責任を負わねばならない。自由に句読点をうて、この喜びは、同時に、大変しんどいことを心得ておくべきである。諸君の、有意義な大学生活を期待してやまなし。

（教養科主任教授）

新入生へのメッセージ

齊藤 享



スエーデンにノーベル（一八三三―一九九六）という化学技術者がいた。彼は火薬の研究を、特にダイナマイトの発明者として知られている。彼の発明したダイナマイトは当時進行中であつた西欧の産業革命の時流にも乗り、彼の設立した会社は大成功を収め、このため彼は西欧有数の富豪となつた。しかし当時はまた列強国の勢力拡張の時期でもあり、当然のこととして、彼の発明したダイナマイトが戦

争のために利用される事となつた。この事をノーベルは非常に悲しんだ。そして彼の死後、彼の全財産が彼の遺言によって世界の平和と科学の進歩の為に有名なノーベル賞の基金としてあてられることになった。このようにして、毎年、物理学、化学、医学と生理学、文学、平和の五つの分野において世界で最も貢献のあった人にノーベル賞が贈られている。

私は第二次世界大戦当時、長崎師範に奉職しており、浦上天の堂の近くに下宿していた。私が原子爆弾に見舞われなかったのは、その時兵役に服していたからである。戦後、長崎を訪れた時、下宿していた付近は家一つない平和公園となつており、彼らのために、現在、全人類を

何回か全滅させることのできる原子爆弾が貯蔵されているという。恐ろしい事である。

また現在は新たな産業革命が進行中であり、その主役はロボットとコンピューターである。古い工業国である西欧諸国においては、これらの導入が失業者の増加を招くという反対もあり、導入に余り積極的でなかった。日本ではこれらの導入が積極的に行われ、国際間の貿易において有利な地位を占めるに至つた。しかし反面、日本と諸外国の間に経済摩擦が生じて来た。

現在では国家関係も入り組んでおり、種々の国際問題において全人類の見地から見た協調性が要求される。個人の場合も同じで、各自が各自を主張したのでは人類社会は成立しえない。

さあ、この夏はカナダだ！

伊藤 隆



こんなに楽しいです

キミ、なにをさぐさ考えているのかね、いい若いものが。まずは出かける決心をすることだよ、キッパリと。

学長が「日本はいま世界を舞台にして活躍しているのだから、諸君は国際人であることを義務づけられている……国際社会に生きる資格を得せよ」と、キミに呼びかけているのが耳にはいらぬのかね。

いや、キミが技術者として、将来生きていくというのなら、これは当然すぎる話だよ。国際人でない技術者なんてのは、死んだのも同然で、日本の技術者が死んだら、日本人全体が生きてもはいられなくなるのさ。日本から技術・工業を取り去ったら、一体何が残ると思うかね。それによつて生きる道は、ほかにあるのだろうか。ないネ、やはり、だから、活きる技術者になつて、日本を支えてほしいネ。もつとも、英語でなくとも、独語でも仏語でもロシア語でもスペイン語でも、また中国語でも、もちろんいいのさ。どれでも外国語をマスターすれば、もう一つの光輝く世界を手にすることはできるから、甲乙つけがたい立派なことさ。

でも、昔の商人にソロバンが欠かせなかつたように、今、技術者にとって英語力は欠かせないと思うね——絶対さ。

なに、英語がでんないからカナダへ行くのがこわいというのかね。冗談言つちやない。

自信がないからこそ、あちらに行つて力をつけよう、というのが青春時代の考え方だろうに。そういう人たちのためにこそこの留学制度があるのだし、すばらしいプログラムを用意してやさしい有能な先生方が待つていてくれるよ、プリティンチュ・コロニア大学では。一流だぜ。ホームステイに自信がないとでも言うのかね。この新聞の36号（三月二〇日号）に、昨年カナダへ行った人たちの特長がしてあるから、もう一度よく読んでごらんよ。全員が「楽しかつた」と答えているじゃないかね。ちなみにこの人たちは、行く前には英語に自信があつた人は、ほとんどいなかつたのさ。みんな家族の人たちから「忘るな、わが子よ、また必ず帰つておいでよ」と言われ、カナダと日本とどっちが実家かわからなくなつてしまつたほどで、互いに涙ながらに別れているわけ。

カナダ、とくに目的の地バンクーバーは、治安が良くて人は親切。日本人びいきのことといつたら、びつくりするほどだよ。キミ、赤の他人とは思えないよ。プールも体育館も自由に使えるし、大学のすぐ裏側には海水浴場があつて、多くの人が全裸で泳いでいるよ。キミも、ハダカのつき合いをしてみたまえ。帰ってくる頃は、キミは生まれ変わったにちがいない。英語力も国際感覚もパツチリさ。

（教養科助教）

文化団体連合会

体育会

クラブ名	顧問	学生責任者	クラブ名	顧問	学生責任者
ハングライダー部	小倉 勝助教授	久保田 聡 (M・3)	アーチェリー部	高橋 篤夫教授	狩谷 茂 (M・4)
無線部	中道 一郎教授	高橋 賢人 (E・3)	アメリカンフットボール部	酒井 誠助教授	吉沢 康弘 (M・3)
BJPフルバンドジャズサークル	木村 哲三教授	久保田秀作 (E・4)	ウエイトリフティング部	松本 繁教授	吉野 功 (M・4)
モダンフォークソングサークル			応援団	窪田 英毅講師	金子 直久 (M・4)
写真部	堀田 勝喜講師	宮下 昌久 (A・3)	空手道部	竹内 淳彦教授	岩崎 和規 (A・4)
自動車部	小倉 勝助教授	西山 武泰 (M・2)	剣道部	難波恒夫助教授	早瀬 善巳 (E・4)
第三文明研究会	桑田 正信教授	佐々木一雄 (M・3)	硬式野球部	鈴木一良助教授	加藤 誠 (E・3)
聖書研究会	伊藤 隆助教授	長谷川昭彦 (A・2)	硬式野球部	柳沢 章助教授	海老原広治 (M・4)
ユースホステルクラブ	高橋 篤夫教授	今野 徹 (A・3)	ソフトボール部	長田 重慶教授	中村 栄作 (E・4)
美術部	杉本安次郎教授	國分 孝英 (E・3)	力撃部	城戸 卓男講師	池元 義人 (A・4)
新建築デザイン研究会	宮坂 修吉教授	高栖 智 (A・3)	柔道部	高橋 琢二教授	滝沢 憲仁 (E・3)
自然愛好会	泰野真直親講師	三芳 雅彦 (A・3)	少林寺拳法部	大川 陽康教授	丹下 誠 (S・4)
計算機研究会	飯倉道雄助教授	福澤 聖 (E・3)	スキー部	大久保勝弘教授	新井 勲 (M・4)
芸能研究倶楽部	伊藤 隆助教授	黒田 良太 (A・3)	体操部	酒井 茂紀講師	西田 高 (M・4)
ロックフィード部	玉木 保助教授	遠藤 博幸 (A・3)	競技部	小林 勉教授	市原 慎二 (A・4)
マイクロコンピュータ研究会	片山 滋友講師	若月 芳紀 (E・3)	硬式野球部	柳沢 章助教授	成彦 成彦 (E・3)
放送研究会	片山 滋友講師	北澤公一郎 (S・3)	硬式野球部	岡本 錦輔教授	小柳 浩義 (E・4)
鉄道研究同好会	岩瀬 勝教授	滑川 寛 (M・3)	ソフトボール部	石崎 敬三教授	小笠原 俊晃 (E・4)
漫画研究同好会	和田 敏一教授	早川 岳志 (M・2)	硬式野球部	鈴木寛次助教授	菅野 元三 (M・4)
			硬式野球部	杉本安次郎教授	佐野 文久 (E・4)
			硬式野球部	廣瀬 治男教授	横山 彰人 (E・4)
			硬式野球部		成川 敬 (A・4)
			硬式野球部		遠藤 智泰 (M・4)
			硬式野球部		田中 典博 (M・4)
			硬式野球部		朝比奈 和典 (A・4)
			硬式野球部		石津 伸一 (A・4)
			硬式野球部		障子 幹 (E・3)
			硬式野球部		清水 久長 (M・4)

文化団体連合会 所属団体一覧

工学部入学試験日程

機械工学科 200名 電気工学科 200名 建築学科 200名 システム工学科 120名

	推薦入学募集	一般入学募集
出願期間	11月1日―15日	1月10日―2月13日
試験日		2月15日―16日
合格発表	11月21日	2月21日
入学手続	第一回目 12月10日まで 第二回目 1月31日まで	2月28日まで
選考方法	書類審査	調査書、筆答・面接による総合審査 〔筆答科目〕 英語、数学、工業科目

大学院入学試験日程

機械工学専攻 8名 電気工学専攻 8名 建築学専攻 8名

	推薦募集	一次募集	二次募集
出願期間	9月11日―25日	10月1日―12日	2月21日―3月3日
試験日		10月14日―15日	3月5日―6日
合格発表	9月30日	10月19日	3月8日

学生諸君へ

後援会会長 鈴木清史



新入生を迎え、大学キャンパスに若さ溢れる昭和六十年代が

始まりました。
先端技術を始め、日進月歩の激しい工業技術の発展をみます今日、すでに工業高校において工業教育を学んだ諸君がより高度なものを求め、日本工業大学に進み、一貫した専門工学の道に励み、各々志す専門分野で研さんを重ね、心身共にどんな新入生を迎え、大学キャンパスに若さ溢れる昭和六十年代が

までに知識を吸収し、将来有能な工業人に、また立派な社会人になることを願ってやみません。堅苦しい、欲張りなことばになりましたが、親心の一端とはこんなものです。
二十七、八年前になります。私も学生生活を横浜で送りました。諸君も存じの太平洋戦争の終戦後のことです。今日のようになんでもあるという時代ではありません。衣食にはまさに汲々とした時代でしたが、世の中には復興の雄音が響きはじめておりました。こうした中、寮生活や下宿生活と学生時代を送りました。友と時間の過ぎるのも忘れ、語り合い、人生論をたたかわせたものです。今にして思えば、さして重大な話題ではなかったようですが、こうした語らいの中、私自身さまたと学び、人生の礎ができたと思います。
この頃の私も学生の飲物と

いえる、くしくも今流行の焼酎でした。しかも、今日の酎ハイというしゃれたものではなく、梅割りというものです。ろくに酒の味もわからない頃ですが、口当たりが良く、安かったからです。横浜は坂の多い街です。学校も宮面ヶ丘という丘の上にあり、隣り合わせに学生寮がありました。坂道を上り、丘の上の寮に着く頃には一杯の梅割りも結構われわれを一酔千日にしてくれたものです。
諸君の志す専門分野の勉強、研究に励むと共に多くの良き友を選び将来の礎をつちかうのがこの学生時代です。この貴重な学生時代を少しでも意義あるものとしてほしいと思います。
人生は耐えることから始まるといっても決して過言ではありません。悩みまた苦しみには幾度となく直面します。このキャンパスで耐えることを学んでください。必ずや明日の諸君のほれやかな日々がくるはず。日本工業大学ではすでに九千名に近い卒業生が社会の各方面で立派に活躍しております。この多くの良き先輩に恵まれた諸君は幸せです。先輩に負けることなく、また後に続く後輩の良き先輩となるよう頑張ってください。

後援会は諸君の母なる大学の充実、発展を応援しております。諸君の学びの場、キャンパスに緑を。ほか諸君の勉学の場にふさわしいものしよう心掛けております。大学の先生方、同窓会の先輩、後援会のご両親が常に諸君と共にあります。諸君が有能な、そして人間性豊かな、たくましい人に成長することを願い、楽しみにしている次第です。

〔前号の記事訂正〕

「卒業計画一覧」(建築学科・高橋雅充研究室)の中山俊秀君のテーマをつぎのとおり訂正します。

☆木構造の耐震要素に関する実験的研究―壁パネルの両振り繰り返し水平加力実験

募集

ヨーロッパ研修旅行
カナダ短期留学



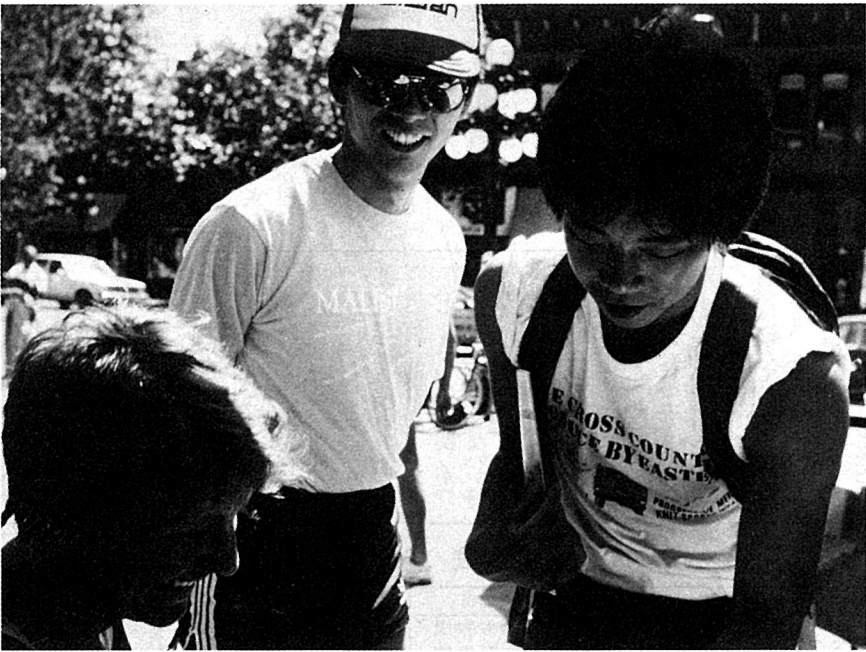
第13回 日本工業大学

ヨーロッパ研修旅行

期 間 60年 8 月21日～9 月11日 <22日間>
費 用 585,000円
行 き 先 アテネ→ローマ→フィレンツェ→ベニス→ミラノ→イン
ラーケン→チューリッヒ→ローデンプルグ→ハイデルベル
グ→ケルン→パリ→バルセロナ→マドリッド→ロンドン
窓 口 学生課

第2回 日本工業大学

カナダ短期留学 (語学研修)



期 間 60年 8 月4日～8 月29日<26日間>
費 用 550,000円 (30人の場合)
研 修 先 プリティッシュ・コロンビア大学 (UBC) の語学研修所
(カナダ・バンクーバー市)
プログラム 月～金曜日 午前中3時間教室で授業、午後は自由な課外活動。
週末には小旅行がある。
カリキュラム ①聞いて理解する力②単語と熟語③英会話④バンクーバー市内
での英語の実践的な活用
宿 舎 ホームステイ (バンクーバー市在住のカナダ人の家庭に滞在し、
その家族の一員として生活する。)
そ の 他 UBCでの語学研修終了後、アメリカのサンフランシスコとロ
サンゼルスへ渡り、研修成果を实践する。オプション・ツア
ーもある。
窓 口 教務課